The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	CSCDインタビューズ : CSCDの顔を撮る
Author(s)	久保田, テツ; 本間, 直樹
Citation	Communication-Design. 2012, 6, p. 69-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9336
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

CSCDインタビューズ
――CSCDの顔を撮る

久保田テツ（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）
本間直樹（大阪大学CSCD）

CSCD Interviews: Shooting “Facescape” of CSCD

Tetsu Kubota（Center for the Study of Communication-Dsign, Osaka University）
Naoki Homma（CSCD, Osaka University）

「CSCDインタビューズ」は、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター広報デザイン活動の一環として、CSCD構成員・関係者を対象にビデオインタビューを実施し、一人当たり10分のインタビュー作品を試験的に制作・発信するプロジェクトである。その目的は、大学組織におけるビデオ映像メディア活用の方法を提案すること、大学を構成する多種多様な個人を描き出すこと、にある。

“CSCD Interviews” is a project to produce a series of video interviews which describe each face and personality of CSCD stuffs. 10 minutes video pieces were created and distributed in Osaka University and Web Site. These pieces will make, as a whole, “Facescape” of CSCD.

キーワード
顔、映像、インタビュー、パブリックリレーションズ
Face, Video, Interview, Public Relations

はじめに

「CSCDインタビューズ」は、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）の関係者を対象にビデオインタビューを実施し、一人当たり10分のインタビュー作品を試験的に制作するプロジェクトである。このプロジェクトの主な課題は次の2点である。

（1）大学組織におけるビデオ映像メディア活用の方法を考える。
（2）大学を構成する多種多様な個人を描き出す。

以下、この2つの点に即してプロジェクトの概要と成果、そして今後の展開について述べる。

1. 大学組織におけるビデオ映像メディア活用について

1.1 配信形態

本プロジェクトは、CSCDの関係者を対象としたビデオインタビュー作品制作に向けた試みであると同時に、CSCDという大学部局の広報活動の試みでもある。そのため、現在は下記2種類の映像配信メディアを活用した情報発信を行っている。ひとつは、大阪大学学内に新設された大型ディスプレイシステムである。2009年6月より、大阪大学学内の14カ所（豊中キャンパス7台・吹田キャンパス4台・箕面キャンパス2台・中之島センター1台）に大型ディスプレイの運用が開始された。「O+PUS（オーパス）」と名付けられたこのシステムは、学内構成員のコミュニケーション活性化を目的とし、大学総長や部局からのメッセージ、大学のオフィシャルなイベントの記録、そして学生の手による映像作品などがハイビジョン品質によって放映される仕組みとなっている。O+PUSは、全てのキャンパスの、主に図書館や食堂といった公共施設に設置されているため、学生や教職員の目にも留まりやすい。その意味で、学内に対して映像情報を伴った広報を考える際、有益なメディアとなっている。一方でO+PUSを活用した映像配信では、目的的に視聴を求めるユーザーを取り込みにくいという欠点もある。O+PUSでは、各映像コンテンツは基本的に大学本部に置かれる管理者によって、任意にタイムライン上にプログラムされ配信される。また、いわゆるテレビ欄のような時間割が一般に公表されていないため、番組を知る学内関係者ですらも目的をもって視聴することは困難である。しかしこのことは逆に、"偶然目にする"大学内関係者への訴求こそがO+PUSの最大の利点であると言い換えることができる。また本プロジェクトでは、そのようなO+PUSの特性をフォローする意味で、動画共有サイトとして多くのユーザーを持つ「YouTube」を並行して活用している。YouTubeはwebページ上で映像を視聴することが可能なメディアであり、その意味でO+PUSとは真逆の特性を持つと言える。またCSCDの webページからのリンク設定やページへの埋め込みを行うことにより、大学関係者を除く一般の視聴者に対しても訴求することができると考える。

1.2 大学と顔

本プロジェクトは、CSCDの広報機能と連携している。広報、「パブリックリレーションズ」は、企業などの組織が外部に対して情報を発信することと捉えられるのが一般的である。今回試作された作品は、大学内で視聴可能な機器（O+PUS）およびYouTubeという動画共有サイトを通して学内外に発信されることから、CSCDに関する情報をより多くの人たちに向けて発信するという意味で、広報業務の一環をなしている。組織の広報にあたって

は、通例、組織を代表する職位にある者や広報担当者が情報を発信することが多いが、大学という組織は、教職員学生など多種多様な人々の集合であるという特徴も踏まえ、このプロジェクトでは、組織の大きな輪郭を見せるではなく、構成する個人に焦点をあて、多様な個性をいかに提示するかという点に狙いが定められた。またその観点から、映像インタビューを通して後に述べるように研究や専門に関する説明よりも、人物像を取り上げることになった。

2. 大学を構成する多種多様な個人を描き出す

2.1 制作にあたって

本プロジェクト構成員である、久保田と本間は、映像制作ユニット"VIDEO ROMANTICA"として、2009年夏に新潟県で開催された「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ2009」にて滞在制作された「2009年8月5日晴れときどき曇り」(図1)、および同年秋に大阪府「船場まつり」期間中に制作された「センタービルの思い出」(図2)の二つの作品において、映像インタビューシリーズを作成した。これらの作品はいずれも〈人を描く〉ことに焦点がおかれている。しかし、ここで共通して使用されている手法は、〈インタビューイーの顔を撮らない〉というものである。映像インタビューにおいて、顔は、人物を代表し最も特徴づけるものとして必ず映像のなかに登場する。しかし、上記作品では、インタビューイーの顔以外の体、それも手足といった部分や声、持ち物や住み慣れた環境を描き出すことにより、映像を視聴する者が顔をみずから想像するに任せるということに主眼がおかれている。また、両作品とも、インタビューイーが語る「思い出」が主題となっており、作品を観る者が思い出を語る顔を見つめるのではなく、語り手といっしょに過去を回想するかのごとく、その場に居合わせるという雰囲気が演出されている。

「CSCDインタビューズ」もまた、〈人を描く〉という点で上記の作品と多くのことを共有

図1 「2009年8月5日晴れときどき曇り」より

図2 「センタービルの思い出」より

している。今回の映像制作にあたっても、同様の手法を用いることが検討されたが、本プロジェクトでは、顔の見えにくいと言われる「大学」や「専門研究」が制作の背景にあり、また、大学やCSCDを「組織」という側面から描くのではなく、人そのものに焦点を絞ることが中心的な課題であることから、むしろ〈顔〉を中心に撮影を行うことになった。語り手が語ろうとする言葉の説明よりも、語ろうとする様子のなかに滲み出る人となりを画面に示すことが重要であると考えられたからである。

2.2 撮影・編集における工夫

試作品の撮影の対象は、全員に同じ種類の質問を投げかけてそれに答えてもらう様子を撮影した。予め用意された質問項目は、「CSCDについて（人や職場環境など）」「大学と社会の連携について」の2つであり、それ以外はその場で語られたことについて適宜質問がなされた。

インタビューは久保田と本間の二人で行われた。主にインタビューを久保田が、撮影を本間が担当した。撮影にあたっては、できるだけインタビューイーが普段仕事をしている環境で、自然体で話してもらるように配慮がなされた。久保田は質問を一方的に投げかけるのではなく、会話のやりとりを重視し、カメラはインタビューイーを中心に捉えながら周囲の環境も撮ると同時に、久保田の身体の一部をできるだけフレームのなかに残し、会話としての映像を記録するように試みた。(図3)

今回の作品は試験的な制作という性格をもっていたので、久保田と本間のあいだであえて編集方針を統一せず、それぞれ試行錯誤を重ねることにした。例えば本間は、編集に際してできるだけ「その人らしさ」が垣間見られる瞬間を選び出すとともに、通常、効率よく言語情報を伝達するためにカットされるような、言い直しやちょっとした間、考え込む仕草などを積極的に採用した(図4)。用意された言葉よりも、その場ではじめて生まれた表現にこそ、語り手であるその人が現れると考えたからである。また、専門分野の紹介が目的ではないので、名前、肩書き、専門に関する情報をいっさい画面から閉め出し（図5)、CSCDや大学との関わりでその人が何を考えようとしているのか、という点を直裁に見せようと試みた。

図3　右下に久保田の手を収める（「CSCD-001より」）

図4　思わず考え込む様子（同上）

図5　インタビューイーの氏名と肩書きを知らせない

3. プロジェクトの成果と今後の展開

3.1 成果

本プロジェクトで制作したビデオインタビューは、大阪大学大型ディスプレイシステム「O+PUS」および、動画共有サイト「YouTube」に登録した「CSCDTV」チャンネルにおいて放映を行っている。2010年度に試作品として作成し、2011年に配信を開始したビデオインタビュー作品は現在10本が公開中となっており、今後もコンテンツを増やすべく作業を進めている。公開している10本の作品の編集については、本間、久保田それぞれが5本づつ分担して作業を行った。両者の間には、編集するにあたり「10分程度に、そして自由に」という制約を設けた以外、特別なフォーマットを用意することは無かった。それは、被写体の立ち振る舞いを最大限導き出すための最も効果的な枠組みであると考える。一方、そのように編集された作品に対し、散漫な印象ではなく、ひとつの映像シリーズであることを視聴者に印象づけるために、オープニングやエンドタイトルなど、文字を使った映像表現に関しては全て統一したフォーマット（図6）を使用し、映像パッケージとしての強度を上げるよう試みた。

図6　CSCDのロゴを表示させたシンプルなタイトル

3.2 広報・研究・教育に関する意義

CSCDインタビューズでは、専門知識や情報にではなく、それを語る〈人〉そのものに焦点があてられた。それは、〈人〉への関心が、情報の伝達や理解に先立つ、コミュニケーションにとっての不可欠な条件である、と筆者らが考えるからである。映像（動画）メディアは、文字メディアと比較しても、言語情報伝達の効率が高いとはいえず、10分という時間の制約内で収録可能な言語情報はわずかである。そこで、CSCDの広報という観点から、専門的な問題や関心、課題そのものを情報として発信するよりも、「どういう人がそれに取り組んでいるのか」を映像を通して提示することによって、組織の具体的な姿が見えやすくなるのではないか、という仮説のもとで作品制作が行われた。

CSCDでは、異分野・異業種の者たちのあいだでのコミュニケーションを重要と考え、それはCSCDが提供する教育プログラムにおいても課題の一つとなっている。異なる者どうしのコミュニケーションにおいては、専門分野の知識や関心を「分かりやすく伝える」ことだけが重要であるわけではない。何か大切なことを言おうとして、ふと考え込む人の仕草は、それを視聴する者の関心を惹き付ける。語られたことだけでなく、これから語ろうとする人の姿は、さらなるコミュニケーションへの期待を誘発するだろう。今後、この点を理論的な観点から探求する可能性が開かれるかもしれない。

一度作られたインタビュー作品は、様々な利用の仕方ができるだろう。教育にも関して応用可能である。筆者2人が担当する映像制作を扱う授業のなかで、これらの作品は受講者によって視聴され、教材として利用された。人の話を聴くというごくありふれた素材ではあるが、それだけにどのような姿勢で映像化を行うのかについて、考える基本的な生の教材となり得る。また、大学という身近な場所でつくられた映像作品を観ることは、受講生にとって、自ら映像の発信者として、新たに映像制作に取り組むための動機付けにもなるだろう。

3.3 今後の展開

最後に、今後の展開と課題を簡単に述べておきたい。広報面については、これらの作品が視聴者にどのように受け止められたのかについての、検証作業が不可欠だろう。また、上で述べたように、今回とられた手法が、コミュニケーションおよびコミュニケーションデザインにおいてどのような意味を持つのかについての、理論的考察もなされるべきだろう。そして最後に、今回は、教員である筆者2名が制作を行ったが、授業との連携を図ることにより、大学生・大学院生の手によって、同様の作品を産み出すしくみを構築することが、最大の課題となる。